

「〇〇プロフェッショナル」を目指す学生が保育者の子どもとの関わりを通して保育者としてのアイデンティティを意識するために—考察—  
—養成校における学生の実践記録や保育者との対話を通して—

三上佳子\*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

For Students Aiming to Become "〇〇Professional" to Be Aware of Their Childcare  
Identities Through Their Relationships with Children

Through student practice records at the training school and dialogue with nurses-uidance  
process for creating teaching plans that lead to proactive and interactive learning at nursery  
school

Yoshiko MIKAMI\*

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：近年、幼児を取り巻く環境が多様化し複雑化する中で、保育者には子どもの発達や一人一人の特性、家庭・園・地域の環境や状況、そして保育者自身の心持ちも踏まえた柔軟な関わりが求められている。本論文では、学生が「〇〇プロフェッショナルの保育者」を目標に挙げ、園の保育者の実践を継続して観察したり、保育者と対話をしながら、保育者の関わりを考察するようにした。その結果、関わりの言動を分析すると、保育者の関わりには自分の長所・短所も含んだ「自分らしさ」が生かされていることが見えてきた。また学生が「〇〇プロフェッショナルの保育者」を意識して観察をしていくと、目指す保育者像に必要な関わりがより具体的に考察できた。そして、学生と現場の保育者との対話が、自己肯定感や子どもの成長に関与できた喜びである「保育者としてのアイデンティティ」の形成にもつながると考えた。

キーワード：目指したい「〇〇プロフェッショナルな保育者」、保育者と学生の対話、自分らしさ、保育者としてのアイデンティティ

## 1. はじめに

滋賀県保育士実態調査報告書<sup>1)</sup>の保育士養成施設学生調査によると、保育士になりたいと思った主な動機については、「子どもが好きだから」が85.5%でもっとも多く、次に「得意なことを活か

---

\* E-mail: [y-mikami@sumire.ac.jp](mailto:y-mikami@sumire.ac.jp)

「〇〇プロフェッショナル」を目指す学生が保育者の子どもとの関わりを通して保育者としてのアイデンティティを意識するために一考察

せるから」が 22.9%となっていた。目指す保育士像については、「子どもや保護者との信頼関係が築ける」が 77.6%で最も多く、「子どもに好かれる」が 74.4%、「子どもの成長が援助できる」が 72.2%という結果であった。一方、現任保育士調査では、保育士としてのやりがいについて「子どもの育ちに関わることができた」が 87.4%で最も多かった一方で、保育の無償化による人手不足への懸念や職場の人間関係や待遇等の問題も記述されていた。子どもに関わることへのやりがいについては、学生も保育者も共通して持っている。関わりとは何であろう。関わるを辞書で調べると「①関係する、たずさわる、②こだわる、なずむ」（広辞苑 第六版、岩波書店）と書かれている。佐藤慎・佐伯（2017）は、関わりレベルは、相手との関係の深さ、つまり、相手・対象をどの程度意識しているか、相手とのやりとりをどの程度前提にしているか、相手への了解をどの程度とっているかなどによって異なってくると述べている。<sup>2)</sup>保育者の関わりは、専門性の向上にもつながっていくと考えられる。ではどのようにすれば、保育者の関わりが深まるのか。神長（2015）は、保育に関わる専門的知識や技能の習得は重要であると同時に、「保育者としてのアイデンティティ」を挙げている。子どもの世界と出会うことにより、保育の面白さや難しさ、やりがいを感じる事が大切である。保育者養成校の段階で、実習を重ねることを通して、保育者としてのアイデンティティを意識していくことが課題であると述べている。<sup>3)</sup>

感染症の事案から、今年度は実習期間を短縮したりするなど、子どもと関わる機会が少なくなっている。本学では、近隣の附属幼稚園の協力を得て「子どもとの関わり」を研究テーマに掲げている専門演習の 10 名の学生が、実践から学ぶ機会を設けている。子どもと保育者の関わりについては、遊びの場を撮影した動画を視聴し観察するとともに、保育実践を提供してくれた保育者との対話を重ねた。また演習を始めるに当たって、学生自身が目指したい「〇〇プロフェッショナルの保育者」を掲げ、そのことを意識しながら保育を観察するとともに、プロフェッショナルの保育者像が比較的近い学生同士が、観察を基に話し合いをし、関わりに必要なポイントをまとめるようにする。

## 2. 目指せ「〇〇プロフェッショナルの保育者」と保育者の関わり方の視点の共有

### 2.1 目指せ「〇〇プロフェッショナルの保育者」像と、育てたい子ども像の共有

演習に当たり、本学の 2 年生 10 名と附属幼稚園の保育者 5 歳児担任 2 名が、目指したい「〇〇プロフェッショナル」の保育者と「育てたい子ども」の姿を記述し、共有する。（表 1）

\*この研究は滋賀短期大学研究倫理委員会の審査を受け了承済です。

三上佳子

(表1) 目指したい「〇〇プロフェッショナル」の保育像と「育てたい子ども」の姿

	学生A	学生B	学生C	学生D	学生E	学生F	学生G	学生H	学生I	学生J	園保育者A	園保育者B
〇〇プロフェッショナルな保育者	子どもと一緒に楽しむ	子どもを楽しませて、笑顔にする	子ども達を笑顔にする	笑顔でいて、最後まで待つ	一步を一緒に踏む	子ども気持ちを大事にする	子どもを気持ちに寄り添える	子どもにしっかり寄り添う	最後までじっくり待てる	楽しく、みんなと遊ぶ	一人一人に寄り添う	子どもの気持ちに寄り添う
育ててほしい子どもの姿	相手の気持ちになっ て考えられる子、 自分の気持ちに 正直な子	・思いやり のあるやさ しい子	・思いやり のもてる子	・自分のこ とは自分で できて、明 るい笑顔の 子	・やりたい ことをやる 子	・自分の気 持ちはしっ かり伝えら れる子	・思いやり のある子 ・自分の気 持ちははっ きり表現で きる	・気持ちに しっかりと 言える子	・自分から なんでも挑 戦できる子	・自分の気 持ちに正直 な子	自分を存分 に発揮する	自分の思い を伝えたり、 相手の気 持ちを感じ られる子

目指したい「〇〇プロフェッショナル」について、学生は「子どもを笑顔にするプロフェッショナル」が4名、「子どもの気持ちに寄り添う（大事にする）プロフェッショナル」が3名、他にも「子どもと楽しむ」「子どもと一步を一緒に踏む」「笑顔で最後まで待つ」プロフェッショナルを3名挙げていた。一方、現役の保育者2名は「子どもの気持ちに寄り添うプロフェッショナル」を挙げており、なりたい保育者像は、内容の深さに差異はあるものの共有するところが見られる。

2.2 保育者の関わりの視点の共有

今回、感染症予防のため、保育現場の遊びの場面の録画を視聴しながら、観察をしていった。そこで、関わりを共有するために「子どもとの関わり」を学ぼうシートを作成し、保育者の関わりの視点を明らかにする。(表2)

(表2) が示すように、関わりの視点は①受け入れる「見守り・まなざし」「受容・共感」「認め

(表2) 「子どもとの関わり」を学ぼうシート

「子どもとの関わり」を学ぼうシート「 5歳児 月 日			
目指せ「	保育者の関わり視点	保育者の関わり	氏名
受け入れる	1 見守り・まなざし	◎子どもの興味関心・挑戦や試行錯誤を見守る言動 ◎子どもの葛藤を見守る言動	子どもや遊びの様子
	2 受容・共感	◎気持ちをよく取ろうとする言動 ◎考えや思いを知ろうとする言動 ◎理由や状況を知ろうとする言動 ◎表現を受け止める言動	
	3 認める	◎子どもの遊びや言動を認める	
	4		
伝える	5 遊びのモデル(自身が楽しむ)	◎子どものしていることや遊びを楽しむ言動 ◎遊びの中で、保育者の考えたことを提案する言動	
	6 遊びのヒント示す・引き出す	◎気持ちや考えを表現するように引き出す言動 ◎イメージが広がる言動 ◎思考を広げ、解決につながる言動	
	7 励ます	◎葛藤や試行錯誤を励ます言動	
	8 叱る	◎制止したり、いけないことを知らせる言動	
	9 友達とのつなぎ手	◎子どものしていることや思いを他の子に伝える言動	
	10 健康・安全への配慮	◎健康(生活習慣を含)、安全を考えた言動	
	11		

「〇〇プロフェッショナル」を目指す学生が保育者の子どもとの関わりを通して保育者としてのアイデンティティを意識するために一考察

る」と②伝える「遊びのモデル（自身が楽しむ）」「遊びのヒントを示す・引き出す」「励ます」「叱る」「友達とのつなぎ手」「健康・安全への配慮」を挙げ、保育者の関わりの言動を記述する。また子どもの遊びの様子や、保育者の関わりの前後の子どもの姿も記述するようにする。

### 3. 保育実践における保育者の関わりや子どもの姿の共有

#### 3.1 遊びの場を視聴後、「子どもとの関わり」を学ぼうシートに記述し、保育者と対話する

当該の附属幼稚園は、5歳児2クラスである。感染症対応で再開が6月になった。そのため、A保育者とB保育者は、クラス替えをして間もない子ども達が安心して交流できるよう、遊びの場を工夫するとともに、2クラスの子どもの達と関わることを大切にしていた。今回は、学生が遊びの場を撮影した動画を視聴しながら、個々に子どもとの関わりシートに記述する。そして目指したいプロフェッショナルが類似している学生2.3名が、個々の記述した記録を持ち寄り、子どもの言動や子どもに関わった保育者の言動について話し合う。遊びの場面では「カタツムリ」「ドッジボール」「巧技台での遊び」の3つの事例から話し合う。(表3)

(表3)は、事例「カタツムリ」の記録である。6月上旬、感染症対応から、初めて全員が登園してきた。その時、保育者の傍を離れず友達の遊びをみていたユリがいた。6月中旬、ユリがカタツ

(表3) 7月7日 5歳児「カタツムリ」A保育者の関わり 「子どもを笑顔にする」グループの記録

「子どもとの関わり」を学ぼうシート「カタツムリ」5歳児 7月7日			
目指せ「子どもを笑顔にする」のプロフェッショナル		学籍番号	氏名
遊び・生活	5歳児 カタツムリ 6/15 6/29 ・6/8の時、朝、保育者にべったりくっついていたC児。6/15は、赤ちゃんカタツムリのケースに土を入れたり、カタツムリを探したりする。6/29C児は、友達と一緒にシジミチョウを2匹とっていた。土を入れたり、葉を入れたりしている。C児と友達は、土にいるダンゴムシがシジミチョウを食べないか心配で、もう一つの飼育ケースにシジミチョウだけ。入れ替えようとする。1匹、シジミチョウが逃げてしまう。		
受け入れる	保育者の関わり視点	保育者の行動・言葉・表情やまなざし・関わるタイミング	
	1 見守り・まなざし	子どもの土をカタツムリにどのくらい入れるか見守る。C児が自分でダンゴムシを探している姿を保育者が見守る。	
	2 受容・共感	ダンゴムシとシジミチョウを分けたいという気持ちを受け止める。一匹逃したに分けられたことを受け止める。	
	3 認める	6/15 C児は、あっちにカタツムリがいることを保育者に伝えている。	
伝える	4	6/15 C児は、カタツムリのケースをもって、保育者と園庭に行き、「カタツムリいるよ」など会話をしている。	
	5 遊びのモデル(自身が楽しむ)	子どもと一緒にチョウを探しに行く。	
	6 遊びのヒント示す・引き出す	カタツムリだけでなく、アゲハチョウの幼虫?もいたことを伝える。カタツムリの土入れと同時に、土の裏にヒントを出す。紫陽花の葉っぱをのけたりして、ダンゴムシやカタツムリを探す。	
	7 励ます	一匹逃げただけとちゃんと分けられたねと励ます。	
	8 叱る		
	9 友達とのつなぎ手	カタツムリ探しをしつつ、ダンゴムシ探しの友達とも…関わる。(◎児とのつなぎ手)「一緒にダンゴムシを探そうと誘う。C児がカタツムリを探している様子を他の子ども達に伝える。	
10 健康・安全への配慮	子ども達一人一人の行動をよく見て、安全面に気を付けている。		
11			
	めざせ「子どもを笑顔にする」のプロフェッショナル 学んだこと	子どもたちがやりたいと思った気持ちを受け止めてたり、他の虫探しをして入れ子どもと一緒に探しに行ったりしやすいように「アゲハ蝶の幼虫いたよ」「一緒にダンゴムシを探しに行こう」と伝えていたのかなと思った。ヒントを出しながら、自分たちでできた達成感を感じていた。	

ムリの赤ちゃんを園に持ってくる。ユリは日頃から、生き物にとっても興味があった。A 保育者は、早速、ユリと一緒にカタツムリを飼育ケース入れ、土を入れるため、園庭に行く。ユリは A 保育者と園庭で土を入れたりしていたが、やがて自分からカタツムリを探すようになる。ユリは、飼育ケースにダンゴムシがいることを発見し、「カタツムリ、ダンゴムシに食べられないかな」とつぶやく。7月上旬、ユリはカナと一緒に、「シジミチョウを2匹捕まえ、飼育ケースに土や葉を入れていた。(図1)ユリは土にダンゴムシがいたため、ダンゴムシとシジミチョウを別の飼育ケースに移すことを提案する。2人が協力しながら、シジミチョウを別の飼育ケースに移しかえていた。ユリは自分のしたいことを楽しんでしており、真剣にそして笑顔で友達と遊んでいた。

『子どもを笑顔にするプロフェッショナル』グループでは、「A 保育者はユリがカタツムリ等を飼いたいという思いを受けとめ、一緒に探しながら支えていた。ユリは、当初、A 保育者を抛り所に友だちの遊びをみていたが、A 保育者を介してカタツムリなど大好きな生き物と関わっていった。そして気の合う友達と一緒に生き物を探したり、思いを言葉にしたりしながら、自分から動き出し笑顔になっていた」と述べている。

関わりでは、「受け入れる」だけでなく「伝える」の視点の言動が増えており、保育者の積極的な関わりが、ユリの育ちを支えていたと考察している。また学生と A 保育者との対話では、「園庭にはいろいろな生き物がいるため、クラスに飼育ケースや生き物を置いたりする場を用意し、自分たちで探せるようにしている。」「ユリが保育者と触れ合いたいという気持ちを大切に受けとめ、一緒に行動する中で、自分で遊びを見つけ進めていく楽しさを感じてほしいと考えた。そのために、保育者は遊びへのヒントを伝えていくとともに、友達の発想に刺激を受け、自分なりに考えたりしていくことを大切に関わった。」と述べている。

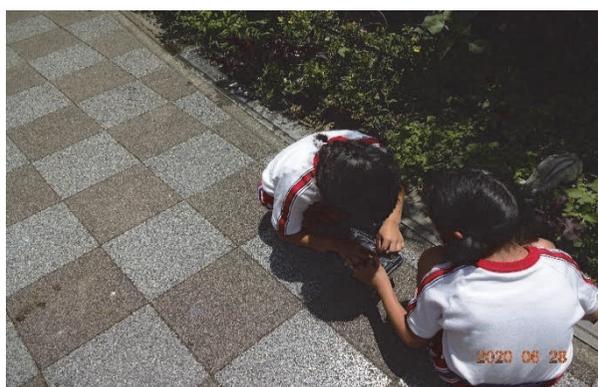


図1「シジミチョウを2匹捕まえ、土や葉を入れる」

「〇〇プロフェッショナル」を目指す学生が保育者の子どもとの関わりを通して保育者としてのアイデンティティを意識するために一考察

(表4) 7月14日5歳児「ドッジボール」B保育者の関わり(「楽しむ・待つ・一步を支える」グループの記録)

「子どもとの関わり」を学ぼうシート「ドッジボール」5歳児 7月14日			
目指せ「楽しむ、待つ、一步を支える」のプロフェッショナル		学籍番号	氏名
遊び・生活	5歳児 6/29		
	5歳児2クラスがドッジボールを始める。コーンで、ドッジボールの枠を作って、チーム分け。なかなか決まらない。保育者は「困ったな、どうしよう」と声をかける。男女チームに分かれて対戦決定。ボールジャンケンをしてボールを投げる代表を決める。保育者は、仲間に入り、対戦状況を言葉で伝え、一緒に喜んだり驚いたりして楽しむ。一回目は、男の子が勝つ。二回目開始・・・。		
受け入れる	保育者の関わり視点	保育者の行動・言葉・表情やまなざし・関わるタイミング	子どもや遊びの様子
	1 見守り・まなざし	・「みんなに任せるわ」と伝え、みている。・チームが決まらなくても、分け方を言わずに、子ども達が決めるまで見守る。チームが決まらなくても焦らず、子どもからの行動を待っている。	・保育者との掛け合いで、次々と意見がでる。
	2 受容・共感	・子ども達の気持ちや感情を言葉にしている。「どうしよう」「困ったな」と決まらない気持ちを言葉で伝え、周りの子と共感している。	・なんのチームにするか、みんなで意見を出し合っている。
	3 認める	・「女の子ばっちり」と認めたり、周りの子に「待ってな」という。	
伝える	4		
	5 遊びのモデル(自身が楽しむ)	・中継のように、ドッジボールを伝え、保育者自身も楽しむ。ボールが当たった時、同じチームの子と喜んでいる。	
	6 遊びのヒント示す・引き出す	・次どうすると聞いている。	・ジャンケンしたい人、手を挙げてなど、子ども達から進める。
	7 励ます		
	8 叱る		
	9 友達とのつなぎ手	・「分けられへん、決められへんや」と周りの子に伝えている。	・ボールジャンケンを男の子がしているとき、早く終わった女の子は待っている。
	10 健康・安全への配慮	・「こける?ぶつかると?子に「痛かったな」と声をかけ、ケガがないか確認している。	
	11		
	めざせ「楽しむ、待つ、一步踏み出す」のプロフェッショナル学んだこと	・子ども達が行動するのを待ち、保育者自身が楽しい気持ちや言葉にすることで、子ども達が遊びを楽しめるようにつなげている。	

(表4)は、事例「ドッジボール」の記録である。5歳児2クラスが自ら進んでする遊びの中で、数名の子ども達がドッジボールを始める。最初にコーンで枠を作った後、チーム分けをする。チーム分けがなかなか決まらない。まだドッジボールを初めて、1カ月あまりである。B保育者は仲間の一人となって、「困った、どうしよう」と声をかける。今回は、男女チームに決まり、ボールジャンケンで、最初にボールを投げる代表が決まる。B保育者は一緒にしていく中で対戦状況を言葉で伝え、一緒に喜んだり驚いたりしているがルールに対しての言葉かけは少ない。一回目は男子チームが勝ち、次に新しいチーム分けが始まった。(図2)



図2「ドッジボール」

「楽しむ・待つ・一步を支える」プロフェッショナルグループでは、「子ども達が行動するのを待ち、保育者自身が楽しい気持ちや遊びの状況を言葉にすることで、子ども達が自分達の遊びとして楽しめるようにつなげていた。」と述べている。

関わりでは、「伝える」として保育者自身が楽しみ、対戦状況を言葉にしながら、楽しい雰囲気や大事にしている。B保育者は、ドッジボールを初めて間がない子ども達に対して「みんなに任せるわ」と伝え、見守り一緒に困るなど共感を大事に関わっていることをわかった。B保育者に尋ねたところ、「5歳児は4歳児から5歳児のドッジボールに参加し、遊び方は何となく理解しているものの、ルール等はまだ理解できていない。今、友達と体を動かすことが楽しい時期には、保育者自身

が楽しむ。そして遊びの状況を伝えることで、自分達でやりたい気持ちを大切にし、その過程で遊び方やルールを共有したり、考えていくことを大事にしたい。」と述べている。

(表5) 7月14日 5歳児と3.4歳児「巧技台」A保育者の関わり(「気持ちに寄り添う」グループの記録)

「子どもとの関わり」を学ぼうシート「巧技台」5歳児 3.4歳児 7月14日			
目指せ「気持ちに寄り添う」のプロフェッショナル		学籍番号	氏名
遊び・生活	5歳児 6/29 5歳児の子ども達が、朝の遊びで、自分たちで巧技台を組み立て跳んだりしている。保育者は、様子を見守り、マットを足したりしている。4歳児がタンブリンをもって、とぶ時に、たいたいでできるようにする。途中、保育者にタンブリンをかわってほしいことを伝え、保育者がかわる。一人一人に聞いて、タンブリンの高さをかえていく。(途中、巧技台が高かったので、取り除く)		
	保育者の関わり視点	保育者の行動・言葉・表情やまなざし・関わるタイミング	子ども遊びの様子
受け入れる	1 見守り・まなざし	・とぶ時、うなづいたりしている。	・「ヨウモリいるんだよ」「ヨウモリ」といってとんでいた。
	2 受容・共感	・タンブリンをたたくのが怖い子にはあえてしない。 ・その子の思いを受けて、タンブリンを交代して、遊べるようにした。	・3歳児?は、とぶために踏み出すのに、時間がかかるがとんだ。
	3 認める	・とんだ時、タンブリンを指差して「大成功」のサインを送る。	
	4		
伝える	5 遊びのモデル(自身が楽しむ)		
	6 遊びのヒント示す・引き出す	・子どもたちの要求に応じてタンブリンを高くしたり、目の前に置いたりする。	・目の前のタンブリンをたいたいでとぶ。近くでたいたいでからとぶ子など一人一人違うとび方をしていた。
	7 励ます	・タンブリンを最初に鳴らし「がんばれ」という合図を送る。	
	8 叱る		
	9 友達とのつなぎ手		
	10 健康・安全への配慮		
	11		
	めざせ「気持ちに寄り添う」のプロフェッショナル学んだこと	・タンブリンをたたくのが怖い子には、無理にたたこうとせず、その子の気持ちを優先していた。 ・子ども達がタンブリンをたいたいでとんだ時に、タンブリンをたいたいで、「大成功」のサインを送っていた。子どもの楽しいという気持ちにさり気なく寄り添っていた。	

(表5)は、事例5歳児と3.4歳児「巧技台」の記録である。登園後、ホールで5歳児が巧技台を組み立てて遊ぶ。そこに3.4歳児も来て、一緒に遊ぶ。A保育者は直接関わらず、安全面等に気を付けながら見守っていた。3歳児がタンブリンをもってきて、タンブリンを叩いてとぶ子ども達と関わり、周りの子ども達もタンブリンを叩いて楽しんでいった。しばらくして、自分も跳びたくなかった3歳児は、A保育者にタンブリンを渡す。A保育者は、タンブリンを一人一人が要求する高さなどに応えながら、一緒に遊んでいた。

「気持ちに寄り添う」プロフェッショナルグループでは、「タンブリンを叩くのが怖い子には、無理にたたこうと促さず、その子の気持ちを優先していた。また子ども達がタンブリンを叩いて跳んだとき、タンブリンを叩いて「大成功」のサインを送っていた。子どもの楽しい気持ちに言葉ではなく、タンブリンの音で表現していた」と述べている。

関わりでは「受け入れる」を大切にされた関わりがみられた。後日、学生とA保育者との対話では、「なぜ、多くの言葉かけをしなかったのか?」という質問に対して、A保育者は「遊びをしていると子どもから多くのことを学ぶことがある。子ども達の自分のしていることを認めてほしいという思いを尊重するとき、言葉より表情やタンブリンの音



図3「保育者との対話より」

「〇〇プロフェッショナル」を目指す学生が保育者の子どもとの関わりを通して保育者としてのアイデンティティを意識するために一考察

の方がより伝わると感じた。」と述べている。(図 3)気持ちに寄り添う表現は、遊びによって多様に広がると感じた場面である。

### 3.2 遊びの場面における保育者の関わりを数値化し、保育者との対話を通じて関わりを考察

保育者の関わりの視点である「受け入れる」「伝える」の保育者の言動数を分析する。(表 6)

(表 6) 「受け入れる」「伝える」の保育者の言動数

		保育者の関わり「カタツムリ・ドッジボール巧技台6.7月」言動数					
	視点	保育者の関わり(言動)	「子どもを笑顔」にするプロフェッショナル	「気持ちに寄り添う」プロフェッショナル	「楽しむ・待つ・一步を支える」プロフェッショナル	合計	
受け入れる	見守り(まなざし)	子どもの興味関心・挑戦試行錯誤を見守る言動	6	3	4	13	18
		子どもの意図を見守る言動	2	3	0	5	
	受容・共感	気持ちをおくみ取ろうとする言動	4	4	4	12	27
		考えや思いを知ろうとする言動	1	4	3	8	
		理由や状況を知ろうとする言動			1	1	
		表現を受け止める言動	1	3	2	6	
	励ます	子どもの言動を認める・褒める言動	4	2	3	9	9
伝える	遊びのヒント(しるし)	子どものしていることや遊びを楽しむ言動	1	2	2	5	8
		遊びの中で保育者の考えたことを提案する言動	1	2		3	
	遊びのヒント(引き出す)	気持ちや考えの表現を引き出す言動	4	4	2	10	23
		思考を広げ、解決につながる言動	3	3	2	8	
		イメージが広がる言動	1	2	2	5	
	励ます(励ます)	意図や試行錯誤を励ます言動	3	5	4	12	12
		制止したり、いけないことを知らせる言動	0	0	0	0	0
健康・安全(健康)	子どものしていることや思いを他の子に伝える言動	5	2	4	11	11	
	健康(生活習慣を含む)安全を考えた言動	7	0	4	11	11	

学生の記録を元に、関わりの視点ごとに当てはまる言動の回数を数えた。3 グループがそれぞれに検討しているため、言動のとらえ方によって内容が重複しているものもある。また遊びが3つ場面に限られており、遊びのねらいや内容、そして参加している子どもの姿やその時の保育者の心持ちも影響しているため、断言はできないが傾向として考察する。

6.7月の5歳児に対して、保育者は「受け入れる」では「見守り・まなざし」「受容・共感」、そして「伝える」では「遊びのヒントを示す(引き出す)」の言動が多かった。そして「励ます」「友達とのつなぎ手」「健康・安全への配慮」の言動が続いていた。感染症予防の対策から十分に園生活ができていない時期であったため、A保育者とB保育者は5歳児が自分で遊びを見つけたり、考えたりして進めていく楽しさを味わっていけるように、見守りや受容・共感を大切にしながら、遊びへのヒントも積極的に示しながら関わっていることが見えてきた。

また、学生と保育者との対話の中で、[気持ちを寄り添うプロフェッショナル]を目指している学生が、「子どもが悲しい気持ちになっている時、気持ちにどのように寄り添っているか。」という質問をした。保育者は「悲しい気持ちを受け止めるとともに、もう一步ポジティブに考えられる方向

に関わっていくことを大切にしている。」と述べている。また[待つプロフェッショナル]を目指している学生が、「保育者にべったりくっついてくる子は、一緒に行動しながら待つことが大事か。」という質問には、「保育者といることによってパワーを充電していると思っている。ただ待つのではなく、一緒に探しながら子ども達が自分で見つけられることが大切である。」と述べている。6.7月、子どもとの関わりでは「受け入れる」ことを大切にするとともに、保育者がポジティブに考えられる方向を示したり、一緒に探しながら自分で見つけられるようにするなど、積極的に「伝える」ことを意識していることがわかる。

#### 4. 保育者としてのアイデンティティの意識化に向けて

##### 4.1 自分の長所や短所も含んだ「自分らしさ」を生かして関わる

A 保育者と B 保育者はともに、「一人一人に寄り添う」「子どもの気持ちに寄り添う」プロフェッショナルを目標にしていた。二人とも 10 年以上の経験のある保育者であり、二人に自分の長所・短所を聞いてみた。

A 保育者は、自分の強みは「ポジティブに学び続ける力がある」と答え、自分の弱みは「いっばいになると、落ち着いた関わりが出来なくなる」「子どものやってみたいという気持ちをどこまで実現させていいのか悩む」と答えている。一方、B 保育者は、自分の強みは「子どもと一緒に遊びや思いを共有・共感できる」と答え、自分の弱みは「自分の中で善悪の判断がはっきりしすぎているところで、状況によってストレートに発信してしまう」と答えている。

高山は、保育者としての姿勢・態度として「自律を支える・有能感を支える・関係性を支える」を挙げ、関わりの 5 つの基本として、①ポジティブな態度・②主体性を尊重し、自己決定する態度・③相手に合わせた応答的な態度・④客観的で公平な態度・⑤自律的で主体的な態度が重要であることを述べている。<sup>4)</sup>保育者の目指すべき理想の関わりである。ただ保育者は子どもとの関わりの中で、自分の短所に気付き、抱えている保育者像や先に挙げた関わりの基本とのギャップに悩む。養成校の学生は、保育実践の経験が少ないため、実習で出来ない自分に出会い、葛藤しているのが現実である。

今回、A 保育者は「学び続けるポジティブな態度」、B 保育者は「子どもと一緒に遊びや思いを共有・共感できる関わり」など自分のよさを保育の中で生かしていた。例えば、A 保育者はカタツムリを飼っていた C 児がチョウチョを逃がしてしまう場面があった。A 保育者は学生に「悲しい気持ちを受けとめるだけでなく、一歩ポジティブに考えられる方向になるように関わっている。」と答えている。B 保育者も後日談でなぜドッジボールのときに、遊びの様子を子ども達に言動で中継したのかという問いに対して「子どもたちのやりたい気持ちに保育者自身が共感し、子どもの行動を言語化することによって、友達とドッジボールの楽しさやルールが共有できると思った。」と答えている。A 保育者や B 保育者は、自分のよさを発揮して、関わっていることが見えてきた。高山の述べた保育者

「〇〇プロフェッショナル」を目指す学生が保育者の子どもとの関わりを通して保育者としてのアイデンティティを意識するために一考察

の姿勢・態度である「自律・有能感・関係性」は、保育者自身の長所・短所も含んだ「自分らしさ」の中で、発揮できるのではないかと考える。

#### 4.2 現場の保育者と対話をしながら、保育者としてのアイデンティティを学ぶ

今回、学生は保育者の実践を観察するとともに、保育者と対話をする中で、子どもの世界に出会い、保育の面白さや難しさ、そしてやりがいを感じる機会になった。神長は、保育者を目指す学生の保育実践の場への継続的な関わりによる実践知の獲得は、保育者としてのアイデンティティをもつことにもつながり、就職へのモチベーションも高まると述べている。<sup>5)</sup>そして保育者としての一步を歩んだ時、足立・柴崎は、保育者のアイデンティティの形成の中で「自分の気持ちを共感してくれる存在」「現在、抱えている問題を一緒に解決してくれる存在」が大きな鍵となり、この二人がいるという環境が、自分一人でも保育ができるようになった有能感や子どもの成長を実感できる喜びとして表れる。これが保育者としてのアイデンティティの形成につながっていくと述べている。<sup>6)</sup>

今回、学生にとって、附属幼稚園のA保育者とB保育者は、保育実践を介して、自分の気持ちに共感してくれたり、質問等分からないことを一緒に解決してくれる存在であった。学生が「〇〇プロフェッショナルな保育者」を目指すには、関わりモデルとなったり、一緒に共感くれたり、解決してくれる保育者の存在がより必要になってくると感じた。保育者との継続的な対話が、保育者としてのアイデンティティの意識化につながっていくことを期待したい。

### 5. 成果と今後に向けて

本論文では、学生が「〇〇プロフェッショナルの保育者」を目標に挙げ、園の保育者の実践を継続して観察したり、保育者と対話したりしながら、保育者の関わりを考察するようにした。実践に協力いただいたA保育者やB保育者も、学生と同様に自身の目指す「〇〇プロフェッショナルの保育者」を掲げ、自身の短所・長所も開示しながら学生と対話をした。保育者養成校の学生と保育者が実践を通して対話を重ねていくことは、専門的知識や技能の習得とともに、保育の面白さや難しさ、やりがいを感じ、キャリアの段階に応じた「保育者としてのアイデンティティ」を高めていくことにもつながると考えた。

そして、学生や保育者が滋賀県保育士実態調査の報告書に挙げられている保育士を目指した動機や保育士としてのやりがいと今の自分とのギャップを抱える現状の中で、「〇〇プロフェッショナルの保育者」を意識して観察し、具体的な関わりを構築させていくとともに、自分の長所・短所も含んだ「自分らしさ」を生かしていくことが、自己肯定感や子どもの成長に関与できた喜びである「保育者としてのアイデンティティ」の意識化にもつながることが見えてきた。

今後、保育実践や学生と保育者との対話を継続しながら、学生が、子どもの姿を介して、保育者としてのアイデンティティを意識し、保育者としての専門性ややりがいにつながっていくように、

考察を重ねていきたい。

## 謝辞

本研究は、学生と保育者が「保育者の子どもとの関わり」について、対話をしながら考察した。本研究を遂行するにあたって、本大学の附属幼稚園小野清司園長をはじめ、近藤鉄矢教諭、大谷薫教諭をはじめ園の教職員にも協力をいただいたことに、深く御礼申し上げます。

## 文献・ビデオ

- 1) 滋賀県 滋賀県保育士実態調査報告書 (2020) (調査地域・滋賀県, 対象・保育施設調査 245 件, 現在保育士調査 4,972 件, 潜在保育士調査 208 件, 保育士養成施設調査 5 件, 保育士養成施設学生調査 468 件) P75. P109. P154~P155 滋賀県健康医療福祉部子ども・青少年局
- 2) 佐藤慎・佐伯胖著(2017)「かかわることば」P4-P5 一般財団法人 東京大学出版会
- 3) 神長美津子著(2015) 「専門職としての保育者」P100 保育学研究 第53巻第1号
- 4) 高山静子著(2019)「保育者の関わり方の理論と実践」P30-P33 エイデル研究所
- 5) 神長美津子著(2015) 「専門職としての保育者」P101 保育学研究 第53巻第1号
- 6) 足立里美 柴崎正行著 (2010) 「保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて—」P115 保育学研究第48巻第2号